

河出文藝選書

劇的なる精神

山崎正和

河出文藝選書

劇的なる精神

崎正和

河出文藝選書

劇的な精神

昭和五十三年二月十日 初版印刷
昭和五十三年二月十五日 初版発行

著者 山崎 正和

装幀者 横山 宏輔

発行者 佐藤 皓三

発行所 河出書房新社

東京都新宿区住吉町九五

振替口座(東京)〇一〇八〇二

電話 営業 三五五―五三一
編集 三五五―五三二

印刷 文弘社

製本 若林製本

©1978 MASAKAZU
YAMAZAKI

山崎正和(やまさき まさかず)
一九三四年、京都に生まれる。
一九五六年、京都大学文学部哲
学科を卒業。
一九六三年、戯曲「世阿彌」に
より、岸田戯曲賞を受賞する。
一九六五年、イエール大学に留
学。六七年、同大客員講師。
著書に『世阿彌』『このアメリ
カ』『野望と夏草』読売文学賞
受賞作『鷗外 闊う家長』(以
上、河出書房新社)毎日出版文
化賞受賞作『病みあがりのアメ
リカ』(サンケイ新聞社)など
の他に『劇的な日本人』『不
機嫌の時代』『舟は帆船よ』(以
上、新潮社)『反体制の条件』
(中央公論社)など多数がある。
現在、大阪大学文学部教授。

目次

書き下ろし巻頭エッセイ
無常と行動

7

猥褻なる存在証明——アメリカ黒人と日本人

36

船と幌馬車の国

55

新しきシルクロード——日本の文化的存在証明への道

64

アメリカ“群島”から“大陸”へ

84

チエーホフとアメリカ人

87

歴史の国・アメリカ

90

ある 満 月

94

個人と国家と儀式

97

みずからの贖罪——『アメリカの夢』評

106

静止的なドラマ——『秀吉と利休』評

111

反語と抒情——『則天武后・筑』評

114

思想は思想、人は人——『ものみな歌でおわる』
『喜びの琴』評

116

「文楽協会」の現状と前途

119

可能性に埋もれた虚弱児

127

芸術家を題材にするということ

130

演劇的感動ということについて

133

世阿弥現代考

136

劇的な精神について——ドラマの恢復と現実の恢復

139

言文一致はさかだちしている——思想と実感の間にあるべきもの

157

歴史と悲劇について——木下順二氏への手紙

172

演劇精神の今日的意義——〈剥ぎとる者〉と〈蔽う者〉

185

反俗の蹉跎の後に

203

歴史の衰退と小説の氾濫

215

現代演劇・二つの罫——アメリカの小劇場を觀て

243

芸術の現状と意味——現代の芸術はどこまで来たか

257

映画論ノート

283

演劇論ノート

301

あとがき

320

劇
的
な
る
精
神

書き下ろし巻頭エッセイ

無常と行動

一

「私には、なんとしてもはかりかねるのでございます。一つの時代の制度に、忠誠であったことが、なにゆえに咎められねばならぬのでございましょうか。」

安部公房氏の小説『榎本武揚』のなかで、ひとりの旧日本軍の憲兵が私たちに問いかける。かれはただ、**久の大義**に輝くひとつの時代に忠実であったばかりに、みずからの義弟を死においこむ奇禍にめぐりあい、やがてその時代が敗戦とともにではなく崩れさったあとには、殺人者としての罪業をたったひとりでないいつけてゆかねばならない。

「時代などと申すものは、とにかくとえらく大きく、地球同様、自分勝手にどうこうできるといふ代物ではないのでありますから、まずまず、向うから勝手に押しかけて参りますのを、黙って迎えるよりしかたないのであります。」時代や、制度を、自分勝手に選べるほどの者でないかぎり、ひいた籤は、ぜんぶ外れときめられておる

とでもいうのでありましょうか。」「世間が忠誠そのものを——内容の如何を問わず、忠誠そのものを——悪徳と見なすのではないかぎり、私はおのれにふりあげられた鞭を、正義の鞭とは考えられぬのであります。いさぎよく、立ち去ることにしますが、それはますます、私を過去へと追いやるだけのことでありましょう。では、はるかに過去よりの怨恨をこめて。」

「いったい私たちは、どうしてある特定の時代に生まれなければならないのであろうか。そうして、それぞれの特定の時代は、どうして私たちのまに、あたかもその時代が永遠の正義であるかのような意匠をつけてあらわれるのであろうか。歴史のなかでいれかわりたちかわりして、相対的であるはずの時代というものが、なにゆえ絶対的な倫理をつきつけて、私たちに服従を要求するのであろうか。▲悠久の大義▼にはせ参じた青年は、時代のからくりのにせられて、ぶざまなどんでんがえしを味わわねばならない。特定の一時期を永遠と見あやまった責任を、かれはたったひとりでも負いつづけてゆかねばならないのである。」

人間の歴史というものは、おもえばそうした不幸な孤独者の、累々と積みかさなる怨恨の遺書によってなりたっているのではないだろうか。

遠藤周作氏の『沈黙』のなかでも、もうひとりの犠牲者がおなじ恨みを訴えている。

「この俺は転び者だとも。だとして一昔前に生れあわせていたならば、善かあ切支丹としてハライソに参ったかもしれん。こげんに転び者よと信徒衆に蔑あはなされずにすんだでありますように。禁制の時に生れあわせればかりに……恨めしか。俺は恨めしか。」

転び切支丹のキチジローは、みずからの弱さのゆえに、拷問をおそれ信徒の連帯をうらぎった。しかしほんとうにおそろしいのは、拷問や肉体の弱さそのものではなくて、かれがほとんど無意識に感じとっている、倫理

の相対性といふことの認識ではないだろうか。キチジローが、ただひと昔まえにうまれあわせていたならば、あたえられた倫理をつらぬくのに、かれにはなんの苦痛もなかったのである。数十万の信徒にまもられて、日本には神学校さえ建てられていたのであった。さらにまた百年まえにうまれあわせていたならば、キチジローには血を流してつらぬくべき、倫理そのものがなかったのである。切支丹の教えそのものが、かれにはまだ聞いたこともない、遠い異国の風俗にしかすぎなかったのである。

キチジローはいま、かれの全人格を失おうとしている。かれのまえから、永遠の救いがとりあげられ、そのかわりに永遠の罪業のおもいがあたえられようとしている。しかもその理由はたったひとつ、かれが愚かにも、この特定の一時代にうまれあわせたという、それだけのことなのである。永遠の正義はあらゆることばで説明されているけれども、かれがほかならぬある時代にうまれあわせたという現実、だれも説明してくれない。うまれきたのはかれ自身の責任であり、キチジローはたったひとつで、わけのわからぬその責任を永遠におわされてゆかねばならない。かれにいえることは、たったひとつ、「俺は恨めしか」という歎^{きよ}歎のつぶやきだけなのである。

私たちは運命によって、ある特定の時代にうまれあわせる。

しかし現代の私たちには、めぐりあった特定の時代の方はよく見えていても、そこへ私たちを送りこんだ、あの運命というものが見えていないのではないだろうか。時代をひとつに結ぶ横の連帯というものは見えていても、人間はその連帯のなかに、それぞれたったひとつで送りこまれたのだという、もうひとつの事実が忘れられているのではないだろうか。

人間を横に結びつける△時代▽という連帯は、いつでもそれに敵対するもうひとつの時代から、みずからふりきるかたちで意識されてゆく。△時代▽が特に鋭く意識される時は、かならず外に敵をもった時代であった。新しい時代は、たんに古い時代とならぶもうひとつの時代なのではなくて、△永遠の正義▽によって聖別された、使命のない手として自覚される。したがって、ひとつの時代に身を挺してかわってゆく行動は、ふつう歴史をつくるいとなみだと考えられているけれども、ほんとうは、歴史をこえたものをつくろうとする行動なのではないだろうか。「われらの時代」、「われらの世代」をたからかに叫ぶ青年たちは、そこに拠って歴史の全貌を裁くことのできる、たかみの場所をきずきあげようとしているのである。——「われらの時代」は決して歴史によってつくられるものではない。歴史はむしろ「われらの時代」がつくるのである。時代は歴史のなかにあるのではない。歴史が時代のなかにあるのである。——ひとつの時代にはせ参じる青年の心のなかには、いつでもこうした美しい驕慢の夢がひそんでいる。

もちろん、このような△時代▽の意識のしかたというものは、おそらくユダヤ・キリスト教のかたの伝統なのであろうけれども、近代にいたっていわゆる進歩の歴史主義によって、確信に決定的な拍車をくわえられたように思われる。「すべての時代は神に直結する」といったランケの優しい眼には、時代はそれぞれ均等な値うちをもって、広大な神のてのひらのうえに粒々とならんでいたのだが、近代の常識にしたがえば、むしろ神の手はたったひとつの時代のうえに——すなわち、人間が現に参与している「われらの時代」のうえにおかれているのである。したがって、△時代▽と呼ばれる水平の連帯は、たんに人間に許されたひとつのつながりであるばかりではなく、どうやら今日では、それ以外のいっさいのつながり方を、積極的に拒絶するような性格をおびているらしい。

だが、こうした△時代▽意識の絶対的な専制のもとにあっては、ひとつの時代からずりおちるということは、人間にとって底なしの暗闇にしみこんでゆく、救いようもない悲惨事なのである。ひとつの時代のうえにおかれていた神の手が、突然もうひとつの時代のうえに移ってゆくのをみると、時代とともに残された人間は、かれが時代に忠誠であればあるほど、たちなおるすべもなくうちめされるほかはない。かれはそのときはじめて、人生の出逢いのふしぎさというものに眼をひらき、その出逢いへとむかってみずからおしだしていった、あの不可解な力に気づくのであるが、そのことはかえってかれの孤独を三倍にするのである。現代にあって、運命というものを見てしまった人間は、中世の西欧において、魔女の姿を見た人間に似ているかもしれない。かれはそういうおそろしいものを見たことによって不幸であるばかりではなく、それを見たという体験を、なんびともわけあえない二重の苦しみにさいなまれるのである。「俺は恨めしか」とうめくキチジローの怨恨のなかには、たんに、悪い時代にうまれあわせた身の不幸がなげかれているだけではないであろう。よい時代であれ悪い時代であれ、とにかくある時代にうまれあわせるということのふしぎさを、だれにもわかってもらえない絶望的な悲しみがこめられているにちがいない。これはおそろしいことではないのだろうか。

いま私たちは、すくなくとも踏絵を踏まなくてもすむ時代にうまれあわせた。その意味では、私たちはキチジローの第一の不幸からはなたれているようだ。あるひとびとはそうなることが人類発展の必然であり、私たちはこの幸せな時代にうまれるべくしてうまれたのだというかもしれない。しかしかりに人類の必然は事実であったとしても、このひとりひとりの私たちが、ほかならぬこの幸せな時代にうまれあわせたということとは、いぜんとして運命の不可解なはずらにすぎないのであって、もしひとびとがその現実を忘れているのだとするならば、私たちはキチジローの第二の不幸からは決してときはなたれていないのである。それどころか、私たちはこ

の第二の不幸を、今日ますます深めているのではないだろうか。現代の人間は、運命というものを甘く見ることに
なれきって、運命の暴力にはだかで直面する能力を、日に日に退化させているように思われてならないのである。
▲時代▼という水平の連帯のうちに生きているかぎり、運命は眼に見えないものというよりは、はじめから見
る必要もないものだといえるであろう。つねに永遠の正義によって保証された▲時代▼を出発点としてものを考
え、終始一貫、水平の連帯の範囲内において生きている人間にとっては、人生はどこまでも筋のおった合理的
な世界であり、たとえ肉体的にはどれほど苦しくても、そのなかで人間はあくまでも自由なのである。——たと
え私たちが毎日のように失敗をくりかえすとしても、それは私たちが永遠の正義についての理解をおこたったか
らであり、合理的な世界の見とおしをあやまったからであって、人間が根本的に不自由な存在であるということ
の証拠にはならない。私たちが時代の進みつつある方向をただしく理解してさえいるかぎり、人間にはどうにも
ならない運命というようなものはないのである。たとえあなた個人はわけのわからぬ偶然によってたおれたとし
ても、人間は個人ではなくて、あの水平の連帯それじたいのことなのであるから、あなたがその連帯にしっかり
と参与しているかぎり、小さな偶然はただ黙殺しておけばよいのである。運命などというものは、永遠の正義の
余白にすぎず、やがては合理的な世界のなかにくみこまれる未開地にすぎないのであって、それについてとやかく
思いなやむことは、時代への積極的参与をおこたるための、卑怯な口実にすぎないといわなければならない——。
運命は、人間の力でねじふせることができるというこの安心感が、いつのまにか運命を街の手相見やおみくじ
の額分におしこめてしまったのであった。

人間は根本的に自由だというこの楽天主義は、しかし、あのキチジローや旧日本軍憲兵の訴えにたいして、完全な答えを用意しているといえるのであろうか。

なるほど旧憲兵は、忠誠を誓うべき時代をとりちがえたのかもしれない。キチジローは意志が弱く、みずから選んだ倫理をつらぬきとおせなかったのかも知れない。だがかりに戦後の世界が百パーセント正しい時代であり、旧憲兵がそれについて無智であったと認めるにしても、いったいかれには時代を比較したり、評価したりするための、公平な資料があたえられていたのだろうか。またキチジローが他のひとびとよりも弱かったとしても、かれの弱さをむざんにひきむいたあの倫理的課題そのものが、はなから存在しなかった時代もあったことを忘れてはなるまい。

「時代や、制度を、自分勝手に選べるほどの者でないかぎり、ひいた籤は、せんぶ外れときめられているとでもいっているのでありましょうか。」

この問いは、人間の自由の限界について、のっぴきならないうたがいをさしだしている。人間はあれやこれやの時代を選びとり、それに参与するかしないかを選ぶことがかりにできるとしても、そうした選択をする自分の足場そのものを選ぶことはできないのである。どの時代に参与するかを選ぶにしても、どのような時代のなかでそれを選ぶかという、選択の場所としての時代はどうして選ぶことができるだろう。気がついたときには、ある特定の選択の場所のなかへ、私たちはすでに送りこまれているのである。

しかももっとおそろしいことには、さて選ぶという現実に直面したとき、私たちには、ある時代に送りこまれたという受動性と、そこに立つてなにかを選びとるという能動性とを、頭で考えるほど明瞭に区別することじ

いがむずかしいのである。ここまでは判断の資料であり、ここからが人間の自由意志だというあざやかな境界を、私たちは現実の生活のなかにほとんど期待することができないのである。

——私たちはかくくしかじかの時代のなかにうまれあわせた。さてそこで、あたえられた時代を場所として、私たちはみずからの未来を自由に選びとろう——実存主義者たちのこうした楽天主義は、選択の場所と選択の自由意志とが、くっきりと一線をひいて区別され得るという前提のうえに立っている。人間にとって自由にならない過去の時間と、自由に選びとれる未来の時間とが、ある一瞬によってすっぱりと切れているという前提のうえに立っている。そうしてもしこれが真実だとすれば、人間は根本的に自由だという証明は、それこそ決定的な保証をあたえられることになるだろう。なぜなら、私たちは未来を自由に選びとることによって、あたえられた過去にも逆に新しい意味をなげかえすことができるのだし、そうすることによって、あるていど、過去そのものをさえ自由に選んだことになるのであるから。

人間は、△投げだされて、しかも企てるもの▽であるという、有名な実存哲学の公式は、この哲学が過去と未来の明晰な峻別のうえにたって、△現在▽というあいまいな時間を認めないという事実をしめしている。ある時代のなかに投げだされて、しかも次の時代を企てる実存的な人間は、いったいその瞬間、どういう時間のなかに生きているのであろうか。かれが立っている場所はもちろん△現在▽と呼ぶわけではないのであろうけれども、その現在にはもはやいかなるポジティブな時間でもなくて、過去はすでに存在せず、未来はいまだ存在していないという意味で、いわば二重の空白としかいいようのない時間なのである。むしろこの純粹な空白こそが、人間の選択を純粹なものにし、人間の自由を保証するだいいちの条件だといえるだろうか。もしも過去がつねに未来のなかにめりこんできて、過去とも未来ともつかぬ時間のかたまりが、私たちをたえず背後からおし出してゆくのだ